

T1A3  
26E94  
(KI44)





明治廿七年一月十六日  
文部省檢定済

小學  
校用  
日本  
歴史  
前編  
第一

例言。

本書ハ高等小學ノ歴史科ニ用フベキモノニシテ  
分ケテ前編後編及ヒ外編トス。前編ハ三冊ヨリ成  
リ第一年第二年ニ用フ、蓋第一年前半期ニハ郷土史  
ヲ授クベキガ故ニ之ヲ除キ、同後半期以下每半年ニ  
一冊ヲ當テタリ。本編ハ國初ヨリ今代マデノ史談  
ヲ以テ仕組ミ、二年期高等科生ヲシテ此ノ處ニ於テ  
歴史科ヲ結了セシムベクセリ。後編ハ四冊ヨリ成  
リ第三年第四年ニ用フベキモノニシテ亦國初ヨリ  
今代ニ至ル事歴ヲ稍詳ニ説ケリ。外編ハ專三年期



高等科ノ第三年ニ用フベキモノニシテ其ノ體裁後編ト同ジクシテ稍省略セルモノナリ。

本書ノ地圖ハ卷首ノ本邦大勢ノ圖ヲ除キテハ唯沿革圖割據圖ノ如キ特殊ノ地圖ノミヲ舉ゲタリ。故ニ教授ノ際ニハ毎度普通ノ地圖ヲ掲ゲテ記事ノ場所、道筋等ヲ指示スベシ。

明治廿六年六月。

校用 小學 日本歴史。前編。第一卷目錄。

- 第一章 緒言。
- 第二章 神武天皇。
- 第三章 日本武尊。
- 第四章 神功皇后。
- 第五章 仁德天皇。
- 第六章 佛教。聖德太子。
- 第七章 藤原鎌足。
- 第八章 奈良ノ都。和氣清麻呂。



第九章。京都。坂上田村麻呂。

第十章。弘法大師。

第十一章。菅公。

第十二章。平貞盛。藤原秀郷。

第十三章。紫式部。

小學  
校用  
日本歴史。前編。第一卷。

### 第一章。緒言。

兒童等ハ既ニ郷土ニ付キテ昔ノ話シヲ多ク聞ケリ。今ヨリ進ミテ廣ク日本全國ノ昔話シヲ聞クベキ時來レリ。サレバマツ日本地理ノ大略ヲ復習シ置キテ、何レノ地ニ如何ナル事アリシヤヲ聞クヘシ。吾ガ日本ハ四ツノ大ナル嶋ト數多ノ小ナル嶋嶋ノ集マリタル國ニシテ、東、南ニ太平洋ヲ受ケ、西、北ニ日本海ヲ受ケ。嶋ノ最大ナル者ヲ本洲ト云ヒ、本洲ノ北ニ北海道アリ、西南ニ四國ト九州アリ。其ノ小



ナル者ヲ云ヘバ、北海道ノ東北ニ續キタル千嶋アリ、九州ノ西南ニ並ビタル琉球アリ、スベテノ長サ九百里ニ餘レリ。

昔ヨリ京都近國ヲ國ノ真中トシ、山城以下ノ五國ヲ畿内又ハ五畿ト名ヅケタリ。畿内ノ西南ノ國國ハ山陰、山陽、南海、西海ノ四道ニ大別サレ、山陰、山陽ノ二道ヲ合ハセテ中國ト云フコトアリ、九州ヲ鎮西、九箇國ト云フコトアリ。九州ノ北ニ壹岐、對馬ノ二嶋アリ、西南ニ琉球諸嶋アリテ共ニ西海道ニ屬ス。

畿内ヨリ東北ノ國國ハ東海、東山、北陸、北海ノ四道ニ大別サレ、北海道ヲ除キテ東北三道ト云フコトアリ。

リ。東山道ノ北ノ端ナル磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥ノ五國ハ古ノ陸奥一國ニシテ、羽前、羽後ハ出羽一國ナリ、之ヲ奥羽ト云フ。東山道ノ中奥、羽ヲ除キテ餘ヲ中山道ト云フ。

東海道ノ相模、武藏、安房、上總、下總、常陸ノ六國ト東山道ノ上野、下野ヲ合ハセテ關東八箇國ト云ヒ又略シテ關八州トモ云フ。小笠原嶋ハ東海道ニ屬シ、千嶋ハ北海道ニ屬セリ。

以上ハ日本全國ノ重ナル名稱ニシテ、スベテ五畿八道ナリ。サテ此ノ日本國ノ四方ヲ見ルニ北海道ハろし、也領ナルからふとニ近ク、千嶋ハかむち、や、つ



かニ續キ、九州ハ朝鮮ト對シ、琉球ハ支那領ノ臺灣ニ  
續キタリ。

日本ハ是レ等ノ國ノ間ニ在リテ、からふと、かむち  
や、つかノ如ク寒カラズ、臺灣ノ如ク暑カラズ、寒暑大  
抵適度ニシテ、穀菜草木程好ク成長シ、人民ハ四時業  
ヲ勤メ、子供ハ學校ノ勉強ヲナスニ宜シ。

サレバ智慧日ニ開ケ、職業日ニ進ミ、農ハ田畑山林  
ヲ養育シテ衣食住ノ本ヲ作り、工ハ之ヲ製造シテ家  
屋衣服器具等トナシ、商ハ之ヲ諸方ニ運漕シテ相互  
ノ有無過不足ヲ補フ。而シテ聖天子上ニマシマシ、  
人民ノ租稅ヲ以テ百ノ官吏ヲ命ジ、學校ヲ立テシメ、

郵便電信ヲ設ケシメ、鐵道汽船ヲ作ラシメ、惡疫ヲ防  
ギ火盜ヲ戒メテ人民ノ職業ヲ安ンセシメ給フ。斯  
クノ如ク各其ノ職務ヲ勤メテ相互ニ利益スルコト  
ヲ天下泰平國家安全ナリト云ヒ、又社會ノ秩序整ヘ  
リト云フ。

然レドモ汝等モシ北海道ニ遊ババ、吾ガ國ニモ未  
ダ聞ケザル一種ノ人民アルヲ見ン。ソハ昔ヨリ此  
ノ地ニ住メルあいの即蝦夷人ナリ。彼レ等ハ男女  
トモ髪ヲ結バズ、身體ヲ洗ハズ、木ノ皮ヲ拆キテ織レ  
ルあつゝト云フ物ヲ筒袖ニ製シ、左前ニ合ハセテ着  
タリ。寒キ時ハ毛皮ノ袖無シテ着、鮭ノ皮ノ靴ヲハ





ク。彼レ等ガ家ノ壁ハ  
唯束子タル葦ノミ。彼  
レ等ガ工具ハ唯五六寸  
ノ小刀アルノミ。彼レ  
等ハ書ヲ讀マズ、字ヲ書  
カズ、算術ヲ知ラズ。彼  
レ等ハ丸木ヲホリクボ  
メタル船ニ乘リテ魚ヲ  
取り又ハ獸ノ骨、竹ナド  
ヲ矢ノ根ニ削リテ獸ヲ  
取レリ。彼レ等ノ中ニ

ハ本洲ノ人民ニ雜ハリテ職業ヲ營ミ、風俗日ヲ追ヒ  
テ改マル者アリ。

汝等ガ父母ノ少年ナリシハ多分明治ノ初年前後  
ナルベシ。其ノ頃ハ郵便、電信、鐵道等未今日ノ如ク  
自由ナラザリキ。況、祖父曾祖父ノ代ニハ全ク是レ  
等ノ物ヲ知ラズ、洋服無ク、散髪ナク、男ハ額髪ヲ剃リ、  
髻ヲ結ビ、其ノ他今日ト異ナル所多カリキ。僅ニ一  
二代以前スラ既ニ此ノ如キ移リ變ハリアリ、況、十代  
前、乃至百代前ノ先祖ノ時ニ於テヤ。

極メテ遠キ昔ニハあいのノ如キ人民或ハ一層開  
ケザル人民國中ニ住ミ居タリ。此タノ如キ日本ガ



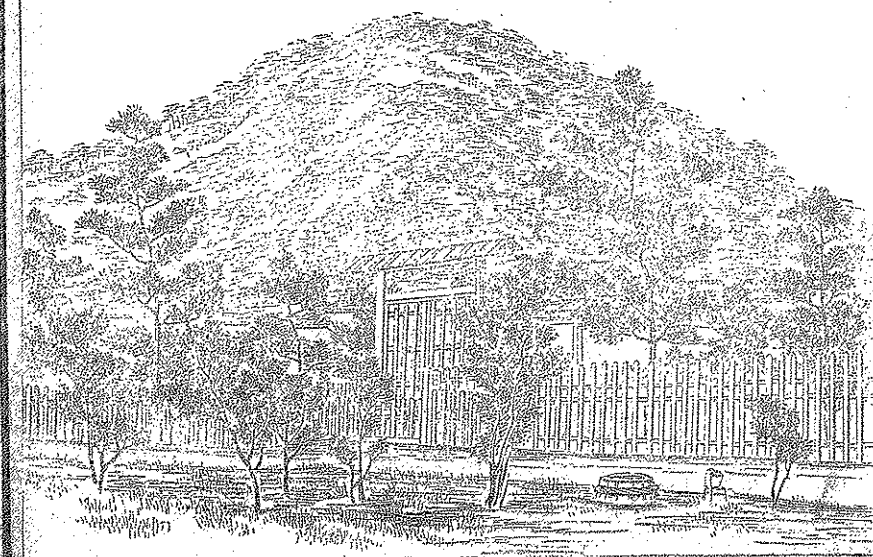
開ケ進ミテ今ノ如キ世トナルニ至ルマデハ色色ノ  
移リ變リアリ。其ノ間ニハ惡人出デテ軍ヲ起コシ  
世ノ中ヲ騷ガセシコトモアリ、又善人出デテ君ノ爲  
國ノ爲ニ力ヲ盡クシシコトモアリ。今ヨリ是レ等  
ノ音語シテ語リ聞カセン。

## 第二章。神武天皇。

毎年四月三日ハ大祭日ニシテ家國旗ヲ立テ、學  
校休業ス是レ神武天皇祭ナリ。抑神武天皇ト申シ  
奉ルハ今上天皇ノ御先祖ニシテ、大凡二千五百年前  
吾ガ日本ヲ治メ給ヒシ、極メテ遠キ昔ノ天皇ナリ。

神武天皇ハ初メ日向ノ國ニ都シ給ヒキ、其ノ頃  
本洲ノ過半ハ猶朝廷ニ服セズ、所所ニ酋長アリテ互  
ニ相爭ヒシカバ、天皇之ヲ憐ミ給ヒ、如何ニモシテ是  
レ等ノ人民ヲ平定一統シ、天下ヲ泰平ナラシメント  
思ヒ給ヘリ。遂ニ九州ヨリ本洲ニ押シ渡リ、大和國  
ニ打チ入り給ヒキ。此ノ間御軍屢難儀ニ及ビ、御兄  
君ヲチ或ハ流レ矢ニ中リテ薨ジ給ヒ、或ハ海ニ入り  
テ薨ジ給ヒキ。

斯カル艱難ヲ經テ、遂ニ野蠻ノ大將長髓彥等ヲ平  
ゲ、全國一統ノ基礎ヲ定メ給ヒケレバ、大和ノ國ナル  
橿原ノ宮ニテ天皇ノ御位ニ即キ給ヒキ。此ノ年ヲ



日本紀元第一年ト數ヘ  
神武天皇ヲ日本天皇第  
一代ト數ヘ奉ル。然リ  
シヨリ以來御子孫連綿  
ト受ケ繼ギ給ヒ、今上天  
皇ハ百二十一代ニ當タ  
ラセ給ヒ、明治二十三年  
ハ紀元二千五百五十年  
ニ當タレリ。  
①一月十一日紀元節ハ  
即神武天皇御即位ノ日

ニシテ四月三日ハ其ノ崩御ノ日ナリ。御陵ハ大和  
ノ國畝傍山ノ麓ニ在リ。御陵地方二町計リ、白砂ヲ  
以テ築キ固メ、石ノ玉垣、櫓ノ御門、廣壯清潔ニシテ永  
ク皇威ノ尊キヲアラハセリ。橿原ノ宮ノ跡モ同ジ  
山本ニシテ、天皇ヲ祭レル橿原神社アリ。

### 第三章。日本武尊。

神武天皇大和ニ都ヲ定メ給ヒシモ四方ノ國國ニ  
ハ野蠻ノ民尚王政ニ順ハズ。紀元七百年代景行天  
皇遠ク東北諸國及ビ九州ノ諸國マデモ征伐シ給ヘ  
リ。東北諸國ニハ蝦夷即あいの人種充満セリ。西



南ニハ今ノ薩摩、大隅、日向ノ地、其ノ頃ハ襲ノ國ト云  
ヒシガ、住民ノ豪勇ナルヲ以テ又熊襲ノ國トモ稱シ  
キ。

景行天皇ノ御世ニ熊襲ノ大將熊襲梟帥、弟梟帥兄  
弟ハ西國無雙ノ勇將ニシテ、勢甚猛カリケレバ、天皇  
皇子倭男具那ヲ遣ハシテ之ヲ討クシメ給ヒキ。皇  
子御年僅二十六、心逞シク力飽クマデ強ク御座シマ  
シキ。

皇子ハ直チニ熊襲ノ國ニ下リ、女ノ装ヒヲシテ、唯  
一人熊襲梟帥ガ家ニ入り込ミ給ヒキ。熊襲梟帥其  
ノ美シキヲ喜ビ、傍ニ召ビテ酒宴ノ給仕ヲサセケリ。

酒宴半バニ皇子ツト立チテ熊襲梟帥ガ衿首ヲ攫ミ、  
懷劍拔イテ胸元グサト刺シ給フ。弟梟帥驚キテ逃  
ゲ出ヅルヲ追掛ケテ又後ヨリ突キ伏セ給フ。弟梟  
帥「暫ク其ノ刀暫ク動カシ給フナ。」ト止メテ、

「君ハ何人ゾ。」

「吾レコソハ大和ノ經向ノ朝廷ニ天下ヲ治メ給フ  
天皇ノ御子、名ハ倭男具那。汝等兩人王命ニ從ハザ  
ルヲ以テ、征伐ノタメニ余ヲ差シ向ケ給ヘ。」

「ゲニ、左モ候ハン。熊襲ノ國ニハ吾等兩人最猛カ  
リシ故、熊襲たけるト稱セシガ、今ヨリ君ヲコソ大和  
たけるト申シ奉ルベケレ。」ト言ヒ終ハリテ殺サレヌ。

是レヨリ皇子ハ日本武尊ト名乗リ給ヒ、熊襲亦平ギヌ。

斯クテ日本武尊都ニ歸リ給フ、程ナク又東北諸國ノ蝦夷ヲ征伐スヘキ詔ヲ承リテ發向シ給ヒキ。皇子駿河ニ至リ給ヒシ時、其ノ國ノ者皇子ヲ誘ヒテ廣野ノ中ニ入レ奉リ、四方ヨリ火ヲ付ケテ燒キ殺シ奉ラントセシヲ、皇子寶劍ヲ拔キテアタリ、卑ヲナギ倒シ、危難ヲ免レ、遂ニ彼レ等ヲ平ゲ給ヒキ。

其レヨリ御舟ニテ東シ給フニ、安房、上總ノ沖ニテ難風起コリ、御舟危カリケリ。是レ海神ノ皇子ヲ害シ奉ラントスルナリト人々云ヒケレバ、妃、（ハルノミヤコ）橘姫御

女ニ代ハリ奉ラントテ千尋ノ海底ニ沈ミ給ヒキ。

皇子ハ恙ナク上總ニ上陸シ、其レヨリ常陸地方ヲ平定シテ歸リ上リ、信濃ノ碓氷峠ニテ遙カニ房、總ノ海山ヲ望ミ、橘姫ノ貞節ヲ思ヒ出デ「吾妻ハヤ。」ト歎キ給ヒキ。東國ヲ吾妻ト云フハ是レヨリ始マレリト云フ。

其レヨリ近江ノ伊吹山ノ賊ヲ討チテ病ヲ得、伊勢マデ歸リテ薨シ給ヒキ。皇子若年ノ御身ヲ以テ西ヲ征シ、東ヲ伐チ、速カニ諸賊平定ノ大功ヲ奏シ給ヒシコトエユシナド申スモ愚カナリ。

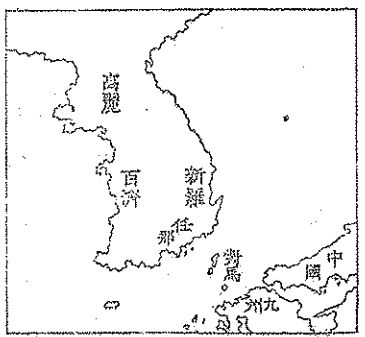


第四章 神功皇后

紀元八百年代ニ至リ、日本武尊ノ御子位ニ即キ給フ之ヲ仲哀天皇ト申ス。此ノ御代ニ熊襲又謀叛シケレバ、天皇御自ラ出陣シテ征伐シ給ヒケレド、熊襲ノ勢強クシテ、御軍ハカバカシカラヌ程ニ天皇崩御アリ。

天皇ノ御后ハ神功皇后トテ、智勇ハ男マサリニ御座シマシケレバ、ヤガテ熊襲ヲ鎮メテ更ニ三韓ヲ攻メ給ヒ。三韓ハ今ノ朝鮮ノ地ニシテ、其ノ頃ハ新羅、高麗、百濟及ヒ前ヨリ吾ガ國ニ從ヘル任那ト二分

カレタリ。是レヨリ先、任那ハ屢新羅ニ攻メラレテ難儀セシモノノ如シ。皇后ハ天皇ニ三韓征伐ヲ勸メ申シ給ヒシカド、聽キ給ハサリキ。



三韓地圖

ココニ至リ神功皇后ハ男子ノ御装ヒニテ甲冑ヲ著シ、兵仗ヲ帶シ、御自ラ海軍ノ大將トシテ、大臣武内宿禰等ヲ率井、不意ニ新羅ニ攻メ寄セ給ヒキ。新羅王驚キ恐レ、陣前ニ降参シ、誓ヒ天日而ヨリ出ツルコトアリトモ永ク屬國トナリテ貢ギヲ奉ラン。ト誓ヒ申シキ。既ニシテ百濟モ吾ガ屬國トナリ、高麗モ亦ツイテ貢

ギヲ奉リキ。

斯クテ神功皇后ノ御子應神天皇位ニ即キ給ヒ、三韓ハ朝貢ヲ怠ラス或ハ綾錦等ノ工女又ハ巧ミナル大工鑄物師ヲ奉リテ吾ガ國ノ職業ヲ助ケ、或ハ支那ノ學問即漢學ヲ吾ガ國ニ傳ヘタリ。今吾レ等ガ讀ミ書ク所ノ漢字ハ即此ノ時傳ハリ來リシナリ。支那ハ三韓ノ西南ニ在ル大國ニシテ、此ノ頃支那ニ開ケタル技術多ク三韓ヨリ傳ハリ來テ吾ガ國ノ開化ヲ助ケタリ。

後世應神天皇ヲ祭リテ八幡大神宮ト申シ、永ク其ノ武德ヲ仰ゲリ。八幡宮ノ最名高キハ豐前ノ宇佐、

山城ノ男山、鎌倉ノ鶴ガ岡ノ宮等ナリ。

### 第五章。 仁德天皇。

仁德天皇ハ應神天皇ノ御子ニシテ紀元九百年代ニ當クラセ給ヘリ。父帝御在世ノ時末子宇治稚郎子ヲ愛シ給ヒケレバトテ、仁德天皇ハ稚郎子ニ即位ヲ勸メ給フ。然レドモ稚郎子ハ兄弟ノ順ヲ失ハジトテ敢テ之ヲ受ケ給ハズ。

斯ク互ニ譲リ給フコト三年ニ餘リ貢ギヲ捧グル者往クベキ所ヲ知ラズ、途方ニクレテ道路ニ相泣クニ至リケレバ、稚郎子遂ニ自教シ給ヒキ。仁德天皇



校用 日本書紀 卷第二 聖德太子 第一

已ムヲ得ズ位ニ即キ給ヘリ。

天皇或時高ミニ登リテ四方ヲ眺メ給フニ、竈ノ烟  
立ち登ルコト甚稀ナリシカバ、アハレ吾ガ民ハ炊ク  
ベキ物ナクテ、果ヲ拾ヒ、草ヲ掘リテ食フナラント察  
シ給ヒ、三年ノ間貢ギヲ免シ給ヒキ。サレバ御物モ  
追ヒ追ヒ乏シクナリ、屋根ハ漏リ、御衣ハ敝ルレド、事  
トモシ給ハズ。

其ノ後豊年打チ續キ、竈ノ烟雲ノ如ク起コルヲ御  
覽アリテ、御喜ゼ斜ナラズ、吾レハ富メリ。ト仰セラル。  
御側ノ人承リ、今斯ク宮殿ハ朽チ、御衣ハ敝レタルニ  
何ノ御富力候ハン。ト申シケレバ、イヤトヨ、民ハ吾ガ

民ナリ。敝レ等ガ富メルハ即吾ガ富メルナリ。ト仰  
セラレケリ。後世其ノ御心ヲヨメル歌ニ曰ハク、

「高キ屋ニ

登リテ見レバ、烟立ち

民ノ竈ハ賑ヒニケリ。」

歷代ノ天皇民ヲ憐ミ恩ミ給フコト大概此クノ如  
シ。吾レ等臣民ハ祖先以來此ノ御恩澤ニ浴シタル  
コトヲ忘ルヘカラズ。

### 第六章。佛教。聖德太子。

① 紀元一千二百年代ノ初メ、欽明天皇ノ朝ニ百濟ヨリ

佛教ヲ傳ヘタリ。佛教ハ支那ノ西南ナルインド即  
 天竺ナル國ノ釋迦ト云フ人ノ立テシ教ヘニテ、其ノ  
 趣意ハ此ノ世ニテ欲ヲ離レ善ヲ行フ者ハ死シテ後  
 魂極樂ニ行キテ永ク樂シミヲ受クベシ、之ニ反シテ  
 欲ニ耽リ惡ヲ行フ者ハ地獄ニ行キテ永キ苦シミ  
 ヲ受クベシ、サレバ短キ此ノ世ノ欲ニ迷ヒテ永ク極  
 樂ノ樂シミヲ失フコト勿レトナリ。

此ノ教ヘヲ吾ガ國ニ弘ムベキカ、禁ズベキカ久シ  
 ク決セザリキ。一千二百年代ノ末ニ推古天皇ノ御  
 世嗣ギ即皇太子ニ聖德太子ト申スガ御座シマシキ。  
 推古天皇女帝ニ御座シマシカバ、太子ハ御名代ト

シテ政ヲ行ヒ給フ、是レ即攝政ナリ。然レドモ太子  
 早ク薨ジ給ヒテ遂ニ帝位ニ登リ給ハザリキ。



此ノ太子深ク佛教ヲ好  
 ミ給ヒ、寺ヲ建テ、説教ヲナ  
 シ、佛教初メテ廣マレリ。  
 太子又漢學ヲ好ミ給ヒ、此  
 ノ時ヨリ直チニ使ヲ支那  
 ニ遣ハシ、又學生僧徒ヲ留  
 學セシメテ彼ノ國ノ學問

藝術ヲ傳習セシメ給ヒキ。

太子ハ是レ等ノ學問ヲ弘メ給フニ付キ、寺大工、佛



畫師、佛師、瓦師、紙墨ノ製造人等ヲ獎勵シ給ヒケレバ、  
是レ等ノ業大ニ進歩シタリ。太子建立ノ寺ニ大板  
ノ天王寺等名高キ者多シ。太子亦多藝ニ御座シマ  
シテ御作ノ佛像ナド今猶殘レル者アリ。故ニ大工  
職人等ハ此ノ太子ヲ職業ノ祖神トシテ祭レリ。

### 第七章。藤原鎌足。

聖德太子ト同心シテ佛教ヲ取り立テタル人ニ蘇  
我馬子ト云フ人アリキ。蘇我氏ハ代代大臣ニ任セ  
ラレ、廣大ナル土地人民ヲ領セシガ、遂ニ馬子ノ孫入  
鹿ニ至リテ、驕リニ長スルノ餘リ、住居其ノ他總ベテ

王室ニナヅラヘ、無禮我が儘數ヘ畫クスヘカラズ。

①

其ノ頃藤原鎌足ト云フ人博學ニシテ智勇アリ、深



藤原鎌足

ク蘇我氏ノ所爲ヲ憤リ、  
如何ニモシテ之ヲ討チ  
亡ボサント企テタリ。

而シテ當代ノ女帝皇極  
天皇ノ皇子中大兄ハ、天  
晴レ英雄ノ君ナレバ、之

ト心ヲ合ハセテ事ヲ謀

ラント思ヒケレドモ未ダ解クベキ折リヲ得ザリ  
ケリ。

一日蹴鞠ノ遊ヒニ參會シケルニ、皇子ノ蹴給フハ  
ヅミニ御靴ノ脱ケ落チケルヲ、鑢足取りテ蹴キ獻ジ  
ケレバ、皇子モ跪キテ之ヲ受ケ給ヒキ。斯クシテ互  
ニ敬ヒ愛スルノ厚意相通ジ、交ハリ日日ニ親シクナ  
レリ。

是レヨリ兩人心ヲ合ハセ内内忠義ノ士ヲ語ラヒ、  
然ルヘキ隙ヲ待チケルニ、三韓進調ノ儀式アリケレ  
バ、入鹿ガ單身昇殿スル時ニ斬リ殺サント謀リキ。  
然ルニ其ノ場ニ至リテ、兼キテ約束ノ人人臆シテ手  
ヲ出グサズ、アハヤ入鹿ニ鎌子ヲ悟ラレント見エケ  
レバ、中大兄物蔭ヨリ踊リ出デテ初太刀ヲ著ケ給ヒ、

サテ後人人折リ合ヒテ遂ニ入鹿ヲ誅シ蘇我氏ヲ滅  
ホシヌ。斯クシテ逆臣亡ビテ天朝ノ威光再輝キ、藤  
原氏モ長ク榮花繁昌ノ基ヲ開ケリ。

既ニシテ皇極天皇ノ御弟孝德天皇位ニ即キ給ヒ、  
中大兄ハ皇太子ニ立チ給ヒ、鑢足ト謀リテ是レマデ  
ノ私領ヲ廢シテ盡ク天朝ニ返上セシメ、天朝ヨリ宜  
シキ地方官ヲ遣ハシテ之ヲ治メシメ、人民ヲシテ領  
主ノ私欲我が儘ヲ免レシメ給ヒ、又直チニ朝廷ニ訴  
ヘント欲スル者ノ爲ニ投書箱ヲ設ケテ投書セシメ、  
或ハ鐘ヲ設ケ之ヲ撞キテ以テ訴ヘノ知ラセトセシ  
メ給フ。其ノ他多クノ新政數フルニ違アラズ。年

校用 日本書紀 卷之六 孝德天皇 大化元年 大化元年ハ紀元

號モ此ノ時ニ初マリ、其ノ最初ナル大化元年ハ紀元一千三百五年ナリ。

後年中大兄皇子帝位ニ登リ給フ、是レ天智天皇ナリ。後世天皇ヲ尊ビテ中興ノ天皇ト申シ奉リ、御陵ハ京都ノ山科ニアリ。饒足ハ官内大臣ニ至リ、位大織冠ニ進ミタリ。饒足ノ廟ハ大和ノ多武峯ニアリ、其ノ社殿樓閣ノ美麗廣壯ナル、千歳ノ下永ノ輔佐ノ大功ヲ表ハセリ。

第八章 奈良ノ都 和氣清麻呂

汝等大和巡リヲナサハ、難原經向ヲ初メトシテ、多

クノ帝都ノ跡ヲ見ルナルベシ。古ヘハ天皇ノ都シ給フ所常ニ定マラス、御代毎ニ變ハリシガ、紀元一千三百七十年ニ至リ、元明天皇大和ノ奈良ニ皇居ヲ定メ、宏大美麗ナル宮殿ヲ建テ給ヒシヨリ七代七十年ノ間爰ニ都シ給ヘリ。此ノ間ヲ奈良ノ朝ト云フ。

元明元正兩女帝相續ギ給ヒ、次ギニ聖武天皇位ニ登リ給ヘリ。此ノ天皇ハ大二佛法ヲ好ミ給ヒテ佛像ヲ造リ寺院ヲ建テ給フコト甚多カリキ。東大寺ノ大佛モ其ノ一ニシテ、大和巡リヲスル者ハ皆其ノ宏大巧妙ナルヲ驚嘆ス。之ニ由リテ當時建築彫刻等ノ術大ニ進歩セリ。

小學 大和巡禮 卷之六 孝德天皇 大化元年 大化元年ハ紀元





テ清麻呂ヲ穢麻呂ト改名シ、大隅ノ國ニテ流シケル。壯ナルカナ清麻呂、勢ニ屈セズ、禍ヲ畏レズ、忠義ノ直言ヲ以テ驕臣ノ心ヲ寒カラシメ、萬世一系ノ王室是レヨリ更ニ基礎ヲ固クセリ。サレバ次ギノ帝光仁天皇ノ御世ニ至リ、道鏡ハ遠國ニ徙サレ、清麻呂ハ都ニ召シ返サレキ。近世ニ至リ朝廷清麻呂ニ護王明神ノ號ヲ賜ヘリ。護王神社ハ元京都ノ高雄山ニ鎮坐セシガ、今ハ鳥丸ノ市街ニ移レリ。

### 第九章 京都 坂上田村麻呂

汝ハ成長ノ後職業ノ暇ヲ得バ、一クヒ京都ヲ遊覽

スヘシ。京都ハ山秀テ河清ク、春ハ花、秋ハ紅葉ノ眺メ多シ。是レ昔桓武天皇ノ都ヲ定メ給ヒシ處ニシテ、其レヨリ以來明治ノ御代ニ至ルマデ一千年間ノ帝都ナレバ、名所、古跡、神社、佛閣ノ觀ルヘキ者數フルニ暇アラズ。明治廿八年ハ遷都ノ年ヨリ一千一百年ニ當タレバ、天下ノ人紀念祭ノ用意ニ心ヲ盡クセリ。

桓武天皇ハ光仁天皇ノ御子ニシテ、神武天皇ヨリ五十代ニ當タラセ給ヒ、最勇壯活潑ノ君ナリ。此ノ君ノ御代ニ著シキ事ハ遷都ト蝦夷征伐ナリ。古ヘヨリ蝦夷ヲ征伐スルコト屢ニシテ次第ニ北方ニ遷

ケシモ、此ノ頃猶奥羽地方ニ蔓リ居テ時時亂ヲ起コ  
シケレバ天皇坂上田村麻呂ヲ征夷大將軍ニ拜シテ  
之ヲ伐タシメ給フ。

田村麻呂身ノ長六尺、面ハ熟セル衆ノ如ク鬚ハ黄  
金ノ針ノ如ク、武藝勇力萬夫モ當タリ難ク、怒ル時ハ  
猛獸モ恐レ、笑フ時ハ小兒モ懷ク。其ノ下ヲ治ムル  
コト寛仁大度ナリケレバ、兵士ノ之ニ懷クコト父母  
ノ如ク、皆其ノ身ヲ忘レテ田村麻呂ガ爲ニ力ヲ盡ク  
セリ。

サレバ其ノ軍ノ向カフ所恰モ風前ノ草ノ如ク皆  
軍前ニ降伏シテ、恩モ威光モ兩ツナガラ蝦夷ニ振ヘ

リ。其ノ子及ビ孫相繼ギテ奥羽ヲ守リ長ク父祖ノ  
威ヲ失ハズ、是レヨリ蝦夷ハ漸ク北海道ニ移リ去リ  
テ奥羽ニ跡ヲ絶チタリ。

京都東山ノ將軍塚ハ田村麻呂ノ墓ニシテ、永ク國  
家ヲ護ランガ爲、遺言シテ甲冑ヲ着シ、兵仗ヲ帶シ、兵  
糧ヲ具ヘ、儼然トシテ皇城ニ向カヒテ立テル所ナリ。  
是レヨリ後大將出デテ征スル時ハ必マツ將軍塚ニ  
參拜スルヲ例トセリ。



第十章 弘法大師

奈良ノ朝ノ頃ハ佛教盛ナリシトハ云ヘ、多クハ堂塔寺院ノ建立其ノ他儀式ノ盛大ナリシノミ。且其ノ行ハルル所ハ重ニ貴人郡人ノ間ナリキ。山城ノ京ニナリテ學問深キ僧徒多ク出デテ巧ミ二人ヲ教導シ佛教ヲ弘メシガ、就中弘法大師尤著ハレタリ。弘法大師ハ讃岐ノ人ナリ。若キヨリ剃髮シテ、名ヲ空海ト云フ、弘法大師ハ謚號即死後ノ尊稱ナリ。空海諸所ノ大寺ニ遊ビ、多クノ名僧ニ從ヒテ佛教ヲ學ビ、遂ニ桓武天皇ノ延暦年中ニ支那ニ渡リテ佛教

ヲ研究セリ。

空海學成リテ支那ヨリ歸リ、京都ノ東寺、紀州高野山ノ金剛峰寺ヲ創メ、又諸國ヲ巡リテ人民ヲ佛教ニ誘ヒ導キキ。其ノ導キ説クコト巧ミニシテ人心ニ入り易カリケレバ、都鄙貴賤爭ヒテ之ヲ信仰シ、是レヨリ佛教漸ク天下ニ遍シ。

空海ハ亦醫藥、温泉、水利等ノ智識ニ通セシカバ人民ニ教ヘテ信仰歡喜ヲ増シタリ。今ニ至ルマデ是レ等ノ物弘法大師ノ發見又ハ傳授ト稱スル者諸國ニ多シ。殊ニ四國ハ其ノ生國ナルヲ以テ舊蹟到ル處ニ多ク、信者ノ巡拜スル者少カラズ。

空海ハ又能書ヲ以テ名高ク、書モ亦能クシ、佛像ノ彫刻ニ妙ナリキ。吾レ等ガ手習ヒノ初メニ習フいろは歌及ビ之ヲ書スル平假名ハ此ノ人ノ作ナリト云ヒ傳ヘタリ。

### 第十一章。管公。

山城ノ京トナリシヨリ百年バカリノ後、文學最盛ニシテ漢學、漢文ノ名人甚多カリシガ、就中管原道真ヲ最著シトス。管原氏ハ代代漢學ノ家ニシテ、道真効キヨリ學ヲ勤メ、聰明ノ名已ニ世ニ聞コエタリ。傍輩ノ人之ヲ妬ム者アリ、思ヘラク道真ハ儒家ニ生

マレ文學ニ成長ス、弓矢ノ如キハ其ノ能クセザル所ナラント、乃強ヒテ道真ヲ勸メテ射ヲ競ヒケルニ、道真イツノマニ習ヒケン、百發百中ノ妙アリテ、傍輩皆及バザルヲ歎ジケリ。

道真大學ヲ卒業シテ文章博士トナリ、詩歌文章ニ巧ミニ、歴史其他ノ學問ニ明カナルハ更ニ言フニ及バズ、讃岐守ニ任セラレテ政事ニ達スルノ名アリ。昔鑑足大功ヲ立テシヨリ藤原氏ノ人專大臣ニ任セララル習ハシトナリ、此ノ頃ニ至リテハ其ノ驕リ漸ク增長シ、殊ニ當時藤原時平年猶若ク、品行修マラサリ。是レヲ以テ時ノ天子宇多天皇道真ノ材ヲ

愛シ、重ク之ヲ用ヒテ以テ藤原氏ノ威勢ヲ分カタシ  
ト欲シ給ヒ、乃時平ヲ左大臣トシ、道真ヲ右大臣トシ  
給ヒキ。

道真恩ニ感ジ、志ヲ盡クシ、天下ノ政ヲ輔タル程ニ、  
君ノ御覺エ益目出タク、世ノ人望モ歸スルニ付ケテ、  
時平等ノ妬ミハ日ニ深カリキ。遂ニ次ギノ帝醍醐  
天皇ノ御代ニ至リ、時平等ノ黨ハ道真今上ヲ廢シテ  
己レガ壻齊世親王ヲ立テント企ツル由讒奏シケレ  
バ、道真無實ノ罪ヲ蒙リテ、遠ク筑前ノ太宰府ニ徙サ  
レヌ。

然レドモ道真ハ君ヲ怨ミ奉ル心露ホドモ無ク、九



月十三夜月明カナルヲ  
見テ、去年ノ今夜清涼殿  
ノ月見ノ御宴ニ侍シ、目  
出タキ詩ヲ作りテ君ノ  
御感ニ預カリ、御衣ヲ賜  
ハリシコトヲ思ヒ出デ  
テ作レル詩

去年、今夜侍、清涼。  
秋思、詩篇獨、斷腸。  
思賜、御衣、今在此。  
捧持、毎日拜、餘香。



道真遂ニ彼ノ地ニ改セリ。後年朝廷道真ノ忠義ヲ思ヒ、正一位太政大臣ヲ贈リ給ヘリ。後ノ人其ノ徳ヲ慕ヒ、名ヲ呼バズシテ管公、管家、又ハ天神様ト云フ。其ノ社ハ京都ノ北野、筑前ノ太宰府、東京ノ龜井戸ヲ初メ、全國到ル處ニ徧ク、神號ヲ天満大自在威徳天神ト云フ。

### 第十二章。平貞盛。藤原秀郷。

醍醐天皇ノ御子朱雀天皇ハ御身弱クオハシマシケレバ、萬事藤原氏ノ計ラヒニテ、其ノ近親獨高位高官ニ外リ、地方官田舎武士ヲ輕蔑スルコト甚シカリ

キ。

ココニ關東武士ニ平將門ト云フ者アリ、武藝ノ達人ニシテ藤原氏ニ仕フルコト年ヲ經タリ。將門功勞ヲ以テ當時ノ警察官ナル檢非違使ニ補セラレンコトヲ望ミシニ、藤原氏各ミテ許サザリケレバ、將門大ニ怒リテ東國ニ歸リ、下總國猿嶋郡相馬郷ニ據リテ謀叛シケリ。

將門桓武天皇ノ後胤ナルヲ以テ、天子ニナラント云フ望ミヲ起コシ、自、平新皇ト稱シ、其ノ館ヲ相馬内裡ト名ツケテ百官ヲ置キ、伯父常陸大掾平國香ヲ政メ殺シ、其ノ他近國ノ地方官等ヲ追ヒ出ダシ、關八州

ノ大半ヲ掠メ取レリ。

加ニ將門ガ親友ナル伊豫掾藤原純友ハ海賊ヲ招キ集メテ南海山陽ノ兩道ヲ掠メ、竊カニ手下ノ者ヲ京都ニ遣ハシテ處處ニ火ヲ放クシメケレバ東西一時ニ亂レテ、ユエシキ天下ノ大事トナリヌ。

國香ノ子ニ貞盛ト云フ者アリ、父ノ仇ヲ復サントテ軍ヲ起コシテ將門ト戦ヒタリ。貞盛勇ナリト雖、將門ガ勢盛ニシテ勝ツコト能ハズ。

下野國ノ住人ニ藤原秀郷ト云フ者アリ、通稱ヲ田原藤太ト云ヒ亦武勇ノ士ナリ。傳ヘ云フ秀郷一日將門ヲ訪ヒシニ、將門兼テヨリ秀郷ノ武名ヲ聞キ

知リケレバ、喜ビニ堪ヘズ、洗ヒ髪ノ雪ノ垂ルルママニ出デ迎ヘ、食時ニナリテ共ニ飯ヲ食フトテ、將門飯ヲコボシ、アハテテ拾ヒ食フ様ナドヲ見テ、秀郷ハ敬レガ輕率ニシテ大事ヲ成ス人ニ非サルヲ知リキト。ココニ於テ貞盛、秀郷軍ヲ合ハセテ將門ト戦ヒ、漸ク將門ヲ困シメタリ。將門自出デテ戦ヒ、其ノ鋒ニ向カフ者ナカリシニ、貞盛ガ能引テ放ツ矢過クス將門ガ米嚢ニ當タリケレバ、サシモノ勇士モ馬ヨリドウト落フル處ヲ、秀郷馳セ寄りテ首ヲ斬リヌ。サレバ京都ヨリ差シ下サレタル討手ノ到着セヌ間ニ東國平ギヌ。

純友ハ程ヲ京都ヨリノ討手ノ爲ニ平セラレヌ。  
此ノ亂ハ朱雀天皇ノ天慶年中ニアリシ故天慶ノ亂  
ト云フナリ。

貞盛功ヲ以テ鎮守府將軍ニ任ゼラル、鎮守府トハ  
奥州ニアリテ蝦夷ノ防ギニ備ヘラレタル城ナリ。  
後世貞盛ヲ平將軍ト云フ。

古ヘヨリ今ニ至ルマデ自天子トナラントテ謀叛  
ヲ起コシタル者ハ將門一人ナリ。然レドモ猶桓武  
天皇ノ後胤ナルガ故ト唱ヘシヲ見レバ、不學ノ將門  
ト雖、王家ノ血統ノ易フヘカラサルヲ知レルコト明  
カナリ。

### 第十三章 紫式部。

從來文章ハ總ヘテ漢文ニテ書キシガ、假名文字出  
來テヨリ和文トテ日本語ニテ文章ヲ書ク者漸ク多  
クナリタリ。殊ニ女子ハ和文和歌ヲ專トシ、一條天  
皇ノ御時ニハ之ヲ能クスル才女多カリシ中ニ、紫式  
部最勝レタル人ナリ。

式部ハ菅公ヨリ百年計リ後ノ人ニシテ越前守藤  
原爲時ト云フ學者ノ娘ナリ。式部幼キ時、兄ガ吏記  
ト云フ書ヲ讀ミ習フ傍ニ在リテ之ヲ聞キ覺エ、兄ガ  
讀ミ誤ルヲ正シテ一モ違ハサリキ。爲時常ニ嘆シ



テ此ノ子ヲ男ニテ持タサルコソ殘念ナレ。ト云ヒキ。



條天皇ノ中宮ノ御許ニ官仕ヘセリ。式部此ノ頃源

式部長シテ博ク和漢ノ書ニ通ジ兼子テ佛教ノ學ニ深ク和歌和文ハ最其ノ長スル所ナリ。右衛門佐藤原宣孝ニ嫁シタルニ不幸ニシテ宣孝早世シケレバ、式部マクニ夫ニ見エズ、入リテ一

氏物語ト云フ小説ヲ作りシガ、其ノ話シノ面白キノミナラズ、文章ノ勝レタルコト前後此類ナク、永ク和文ノ手本トナレリ。

式部ハ學問文章ノ勝レタルニ加フルニ品行端正ヲ以テシ、殊ニ柔和謙遜ノ徳ヲ具ヘタルコト今モ昔モ立チ並ブヘキ人ナカラン。式部サバカリノ學識ヲ具ヘナガラ、人ニ向カヒテハ一ト云フ字ヲダニ知ラサルガ如クナリキ。其ノ娘モ亦母ノ淑徳ヲ受ケ繼ギケン、長女大貳三位ハ後一條天皇ノ御乳母ニ選マレ、次女辨局ハ後冷泉天皇ノ御乳母ニ選マレキ。大貳三位亦歌文ヲ善クシ、其ノ著ハセル小説袂衣ハ

源氏二次ギテ後世ニ稱セラル。

小學  
校用  
日本歴史。前編。第一卷終。

明治廿六年九月廿五日印  
同 年十月三日發行  
明治廿六年十二月三十日訂正再版印刷  
同 廿七年一月三日發行

(定價金九錢)

日本歴史前編一



發行  
者無

代表  
者

大賣  
捌

金港堂書籍株式會社編輯所

金港堂書籍株式會社

金港堂書籍株式會社社長

原 亮 三 郎

東京市下谷區龍泉寺町四百拾番地

金 港 堂

大阪市東區南本町四丁目

金 港 堂

宮城縣仙臺市國分町五丁目



圖書 和圖書 遡



a 1380839547 a

福岡教育大学蔵書